

5

種痘医 松本文齋について

古西 義麿

除痘館資料室

大坂の除痘館は天然痘予防施設として嘉永2年(1849)、緒方洪庵らによって設置され、明治初年までの20数年間を一日も休む事なく牛痘種痘が続けられた。その間、大坂で種痘を継続するとともに、近畿を中心に200ヵ所近くに分苗を行い、また、ワクチン接種による病気予防思想の普及に努めた。明治初年、新政府による天然痘防疫体制に移行して、その歴史的役割を終えた。そのわずか数年後の、明治9年(1876)施行の天然痘予防規則では強制種痘と再三種痘が国民に義務づけられた。他の感染症に比しても非常に早期に実施された完全防疫体制にさいし、大坂の除痘館が果たした役割は少なくないであろう。

この大坂の除痘館が組織として長らく存続すべくバックアップしたのが、丹波分苗所の松本節齋とその一族であった。

大坂の除痘館は常時10人前後の種痘医によって支えられていたが、松本節齋の長子で種痘医・松本俊平はこの種痘施設を最初から最後まで支え続けた唯一の人であった。俊平は長子であったが、年の離れた弟がいたため、実家を弟に任せて大坂で勉学し、その後も帰郷することなく大坂で開業し、大坂の除痘館を支援したのである。それとともに種痘の普及のために、例えば丹波での種痘を薦め、父・松本節齋や、父の門人・足立敬里の師弟に分苗を行った。ただ、松本節齋は分苗を受けた嘉永3年(1850)当時既に64歳に達しており、一方、次男で嗣子の松本敬亮(2代目松本節齋)はわずか13歳のために、それを支えたのが今一人の門人松本文齋(隆平)であった。

松本文齋についてはその名を知る人が少なく、一方、松本隆平の名は松本端編「大阪市種痘歴史」(『論集日本の洋学 I』)所収、清文堂出版、1993年)に見られ、丹波での分苗所設置に活躍するのであるが、最近になって両者が同一人物ということが明らかになり、同時に丹波分苗への経緯も解明された。

松本文齋は単に丹波の分苗所設置にさいして活躍したに留まらず、数年間に亘って師・松本節齋家の種痘を取り仕切り、嗣子・松本敬亮長ずるに及んで同じ丹波国内で種痘を継続したあと、郷里・播州神崎郡栗賀村に帰って、改めて種痘を広めた。冬季の往診に際して雪道で滑って身体を壊して早世したが、その生涯を牛痘種痘法普及に貢献した。

実は松本文齋の分苗所は統計上、大坂の除痘館186ヵ所の分苗所にも数えられていない、丹波分苗所から再分苗されたひとつであるが、大切な役割を果たした丹波の分苗所を永年に亘りバックアップした。

緒方洪庵が大坂の除痘館を設立するさい、天然痘のような感染症に対応するには、地域全体での予防体制が欠かせないと考え、大坂に拠点を立てて種痘を行うとともに、他方で門人や友人を通じて即時に分苗を行った。これらの分苗体制が浸透し、継続するためには緻密な支援体制が必要である。丹波の分苗所に於いては、大坂の除痘館が絶苗に陥った際にワクチンを届けたこともあり、また前述のように松本節齋の若手門人などが丹波を、ひいては大坂の除痘館をも支えた。こうした歴史の表に現れないような支援によって大坂の除痘館事業は一層の広がりを見せたと言えるのでは無かるうか。

なお松本文齋については、拙著『緒方洪庵と大坂の除痘館』(2002年、東方出版)や、「大坂の除痘館分苗所調査報告 2」(『適塾』39号、適塾記念会、2006年)において若干ふれてきたが、最近の再調査にさいして改めて検討するに至った。